

うれしいときにも涙がでる

1987
作品ナンバー0272

文部省選定

現代の子供たちは、家庭の中で父親の仕事について知る機会が少ない。この児童劇映画は、長良川の流れる岐阜市を舞台に、親子の生き方や心の繋がり、教師の生徒への愛情を描きながら、社会に巣立って行く子供たちに仕事や労働の価値、家族の大切さを訴えている。今日薄れがちな、生徒の苦しみに対する教師の真剣な愛情と温かい家族愛を生き生きと描いて考えさせる。



作文の得意なテツヤは、「お父さん」という題で10枚以上という宿題に大張り切りだ。早速、両親に取材を開始する。だが提出期限がきてもテツヤは1枚も書けなかった。

それは、刃物工場で技術者として働いている父が、このところの円高不況で工場が倒産して失業しているのではないかということを知ったためだった。テツヤは塾の帰りに父が刃物の行商をしている姿を目撃してショックを受ける。また、そのことを学校でガキ大将のガバチョにからかわれ、普段はおとなしいテツヤも怒りを爆発させて、大喧嘩をしてしまう。好きな作文を書かないテツヤを心配した先生は、その事件からテツヤの悩みに気付いた。先生はテツヤの父の工場を訪ね、放課後テツヤを呼んで話す。テツヤは先生の話から、父は失業して訪問販売をしているのではなく、会社ぐるみで円高と戦い、技術者も販売の一線に立って会社の再建に努力していることを知る。そんなひたむきな父の生き方から、テツヤは改めて父の少年時代の話聞く。

そんなある日、母も家族を元気づけるためにピクニックを計画した。岐阜城の高い天守閣に立つテツヤと父。眼下に広がる街並をみながら、そこで一生懸命働く父を思い、「ガンバレ、お父さん」と心に湧き上がる思いに、おもわず涙ぐむテツヤだった。

劇
35ミリ
カラー／31分

- 企画
貯蓄増強中央委員会
- 原作
岸 武雄『うれしいときにも涙がでる』
(小峰書店)

スタッフ

- 製作
村山英治
村山英世
- 脚本
神山魁三
神山征二郎
- 演出
神山征二郎
- 撮影
山本 駿
- 照明
山本嘉治
- 音楽
針生正男
- 録音
井上秀司
- 編集
沼崎梅子
吉田栄子
- 記録
福島勇子
- 進行
下村芳樹

- 出演
テツヤ： 川名 誠
父・健太郎： 高橋長英
母・多美子： 二木てるみ
石上先生：安藤一夫
岐阜大学教育学部附属小学校5年2組
他